

長野県木曽郡上松町

# こんびら 金比羅遺跡

— 県道改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 —



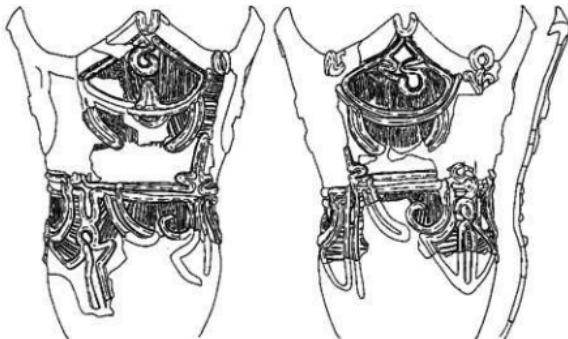
1994年3月

長野県木曾建設事務所  
上松町教育委員会  
木曾郡町村会

長野県木曾郡上松町

# こんびら 金比羅遺跡

—県道改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—



1994年3月

長野県木曾建設事務所  
上松町教育委員会  
木曾郡町村会

## 序

上松町では、今回発見された金比羅遺跡で遺跡数が77ヶ所となりましたが、本格的に発掘がされ報告書の刊行を見た遺跡は、本年度に発掘が行なわれた最中上遺跡のみであり、金比羅遺跡が2遺跡目という事になりました。

このことは、埋蔵文化財保護に対し町としての取り組みの強化が求められているところであると同時に、新たな発見が期待されるところでもあります。

事実、今回の発掘調査においても、郡内でも珍しい弥生時代の住居や、縄文中期の大量の土器を伴った住居址が発掘されるなど、大きな成果を得ることができました。

このことは、発掘調査の指導を頂きました木曾郡町村会の皆様と共に、多大のご協力をいただいた地元の作業協力者の皆様の、献身的な作業のたまものもありました。

今後は、今回の調査の成果を考古学の発展に生かすとともに、多くの方々に郷土の歴史についての関心を持っていただき、地域づくりにつなげていきたいところでもあります。

この度の発掘調査に際しまして、ご指導いただきました先生方、作業に協力いただいた皆様、関係地区の皆様、県教育委員会、木曾建設事務所など、関係機関の皆様に感謝と敬意を申し上げ、序文といたします。

平成6年3月

上松町教育委員会

教育長石原初雄

## 例　　言

- 1 本書は平成5年度に実施された、長野県木曾郡上松町885番地付近に存在する金比羅（こんびら）遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 この遺跡は今回の事業に当たって新たに発見されたものである。遺跡名については小字の調査を行ったところ同名の小字が広範囲に渡っていることが判明した。このため近接する金比羅宮の名前から金比羅遺跡とした。
- 3 本調査は県道改良事業に伴う緊急発掘調査であり、上松町教育委員会が木曾建設事務所より委託を受け、木曾郡埋蔵文化財調査実施要綱により木曾郡町村会に再委託して調査を行った。
- 4 本書の作成に当たっては紙幅の制限等により周辺遺跡等の記載については割愛させていただいた。
- 5 本書の執筆は第1章を村田広司、他は新谷和孝が行った。編集は新谷が行った。
- 6 本書の作成に当たっては大戸美恵子・尾崎俊子・久保寺すみ子・小幡和枝・佐々木満・徳原トラ子・長谷川玲・横道ふさ子・丸山アツ子・新谷和孝が行い、角張淳一・竹原久子・松尾明恵・宮嶋洋一の協力を得た。

調査・整理作業に当たっては、会田 進・市川隆之・神村 透・島田哲男・竹原 学・直井雅尚・永井節治・三上徹也・山下生六の諸氏より多くのご教示をいただいた。

石器の整理作業は調査団内での対応が困難なため、㈱アルカに委託して実施した。

- 7 年代については『長野県史』考古資料編の年代観（長野県史刊行会 1988）によった。
- 8 委託契約書、作業日誌等の関連文書類は調査結果の記載を重視したため、本書では収録していないが、出土遺物・図類とともに上松町教育委員会が保管している。

## 調査体制

調査担当者 新谷和孝（木曾郡町村会埋蔵文化財保護担当）

### 協力者・機関

五十嵐秀男・大戸美恵子・大橋貞雄・大給好英・尾崎俊子・織田 敏・上原温子・久保寺すみ子・久保寺 倍・久保寺 実・栗林千世子・小幡和枝・小林記一郎・坂上金次郎・佐々木満・清水 晶・田下良一・田方善次郎・徳原トヨ・徳原トラ子・中宿光男・長谷川玲・林 勝男・藤村一雄・古瀬定一・丸山アツ子・横道ふさ子  
㈲堀口建設・㈱ジャスティック・㈱アルカ  
堀口義行・大給好純・大畠直己

事務局 上松町教育委員会

教育長 井上純太郎（～H5・9） 石原初雄（～H5・10）

次 長 橋本一郎 社会教育係長（文化財担当） 村田広司

## 目 次

### 序

### 例 言

第1章 調査に至る経緯	1
1) 調査に至る経緯	
2) 文書記録	
3) 調査日誌	
第2章 遺跡の環境と調査	4
1) 遺跡の位置と環境	
2) 調査の方法と概要	
3) 調査の結果	
第3章 調査の結果	5
1) 縄文時代の住居址	
2) 弥生時代の住居址	
3) 集石炉	
4) 土 坑	
5) 出土遺物	
1. 縄文時代の土器	
2. 石 器	
3. 石製品	
4. 弥生時代の土器	
5. 古代以降の遺物	
第4章 調査のまとめ	23
写真図版	25

## 図 目 次

第1図 遺跡の位置	2
第2図 調査位置	2
第3図 金比羅遺跡全体図	3
第4～7図 住居址実測図	8～10
第8図 集石炉実測図	11
第9～11図 土器実測図1～3	14～16
第12・13図 土器拓影1～2	17・18
第14・15図 石器実測図1～2	20・21
第16図 銭貨拓影	22

# 第1章 調査に至る経緯

## 1) 調査に至る経緯

上松町内においては、毎年冬場を中心に国道19号線の慢性的な交通渋滞が引き起こされており、それを解消するため、建設省飯田国道工事事務所により、町の東側を3本のトンネルで結ぶ国道19号上松バイパスの建設が計画された。

一番北側の笹沢地区と瀬木地区を結ぶ第三トンネルについては、瀬木地区内の道路が狭く、工事用車両が通過できないため、木曾建設事務所において、地区内を流れる十王沢川の右岸に、国道19号線からの道路を建設することとなった。

本遺跡は、その道路予定地内で発見された。

## 2) 文書記録

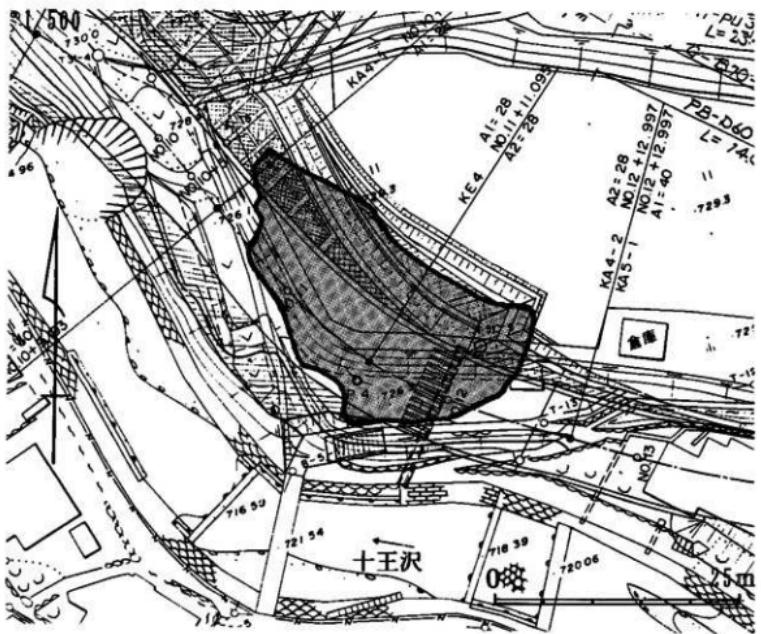
- 平成5年4月27日 県文化財保護指導員山下生六氏より遺跡発見の通知あり。  
4月28日 上松町教育委員会において現地確認。土器片数点を確認。建設事務所及び県教育委員会に連絡し、今後の対応について協議を行う。  
5月10日 保護協議を上松町公民館において実施。出席者は、長野県教育委員会、木曾建設事務所、木曾郡町村会、上松町。  
5月21日 試掘調査を行い、遺跡の範囲の確認を行う。  
5月24日 長野県教育委員会より木曾建設事務所長宛「金比羅遺跡」の保護について通知。  
5月26日 上松町教育委員会より遺跡発見の届出。(57条6-1)  
6月24日 木曾建設事務所長と、平成5年度県単道路改良調査委託契約締結。  
木曾郡町村会と、埋蔵文化財発掘調査指導及び技術指導委託協定締結。  
上松町教育委員会より埋蔵文化財発掘調査の通知。(98条2-1)  
7月1日 機ジャステックと埋蔵文化財発掘調査に伴う遺跡測量業務委託契約締結。  
8月4日 発掘調査、整理作業実施。(平成6年3月18日まで)  
3月18日 平成5年度県単道路改良調査委託業務に関する完了報告書提出。

## 3) 調査日誌

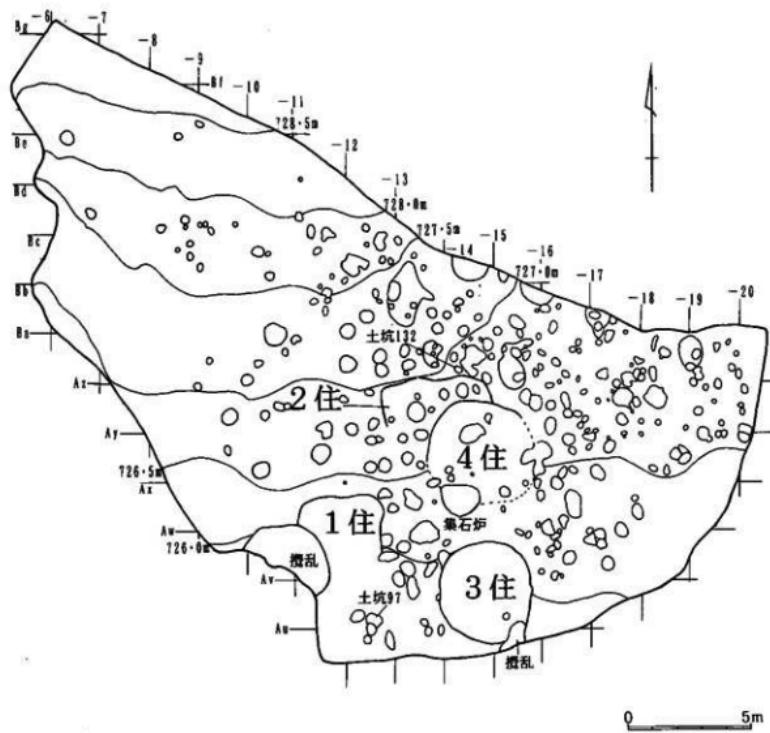
- 平成5年5月21日(金)晴 試掘調査実施。遺跡の範囲を確認する。  
7月26日(月)晴 重機による表土剥ぎ。南側より開始する。  
7月27日(火)晴 重機による表土剥ぎ。  
7月28日(水)晴 重機による表土剥ぎ。  
7月29日(木)晴 重機による表土剥ぎ。  
8月4日(水)曇 遺構検出作業。調査区南側で住居址2軒を確認。  
8月5日(木)曇 遺構検出作業。中央で弥生時代の住居址確認。  
8月9日(月)雨 遺構検出作業。基準点測量の合せを行う。  
8月20日(金)晴 基準点測量実施。調査区内の杭打ちを行う。  
8月23日(月)晴 遺構の掘り下げ。  
8月24日(火)暴雨 遺構の掘り下げ、測量作業を実施する。  
8月25日(水)晴 遺構の掘り下げ、測量作業を実施する。  
8月26日(木)曇 午前中で作業完了。現場片付けを行う。産業用無人ヘリにより航空写真撮影を行う。



第1図 遺跡の位置（上松町管内図使用）



第2図 調査位置（トーンが調査地）



第3図 金比羅遺跡全体図 (1/200)

## 第2章 遺跡の環境と調査

### 1) 遺跡の位置と環境

金比羅遺跡は木曾川の支流、十王沢の北岸の小さな尾根上に位置する。標高は約725mで、日当たりもよく、現在の上松駅周辺の市街地が一望できる場所である。十王沢は北東側から来た流れが、この遺跡のある尾根の下で北西に大きく曲がり、1kmほど下流で木曾川と合流している。今回の調査地は尾根の先端の、北から南に向かって落ちる斜面上の小さな平坦地にあたる。調査地のすぐ南から大きく浸食され、現在の水面は調査地から5mほど下になっている。調査地の北側は水田の造成等により、原地形と変わっている部分もあるが、北側の山の斜面につながっている。

遺跡の基盤は木曾谷の南部に普遍的に見られるカコウ岩層で、その上に御巣によるローム層が堆積し、さらに黒色土が堆積している。基盤のカコウ岩は風化の進行が著しく、露出している部分では、崩壊が進んでいる。

調査地の川に近い部分は耕作の際の攪乱が著しいが、山側の部分はもとの地形の上に多量の黒色土が盛られて水田が作られていたため、遺存状態は良好である。しかし遺構の一部がロームの上の黒色土から掘り込まれていたため、検出時に確認が困難で削平してしまった部分もある。

調査前の耕作地の土手の高さは2m以上あり、相当大規模な土の移動が行われている。この土の移動の時期は不明であるが、何代も前の人人が、月の明かりがさす中で土を運んだという伝承がある。試掘の際の土層断面の観察の所見では、元の地表に近い部分で過去に2度以上水田が作られていたようである。

### 2) 調査の方法と概要

当初、遺跡が確認されたのは、調査区の南側の第1号住居址となった部分の西側で、梅の木を抜いたあととの穴の断面から土器片が出土し、遺構の一部と思われる落ち込みが認められた。その北側は高さ2m近い土手となっていたり、遺跡の範囲等は確認できなかった。

保護協議実施後、遺跡の範囲および遺存状態を確認するための試掘調査を行い、土手の部分に南北に2本のトレンチを設定し、重機による掘り下げを行った。その結果、土手の部分は水田造成時の盛り土で、最初に遺跡が確認された部分が本来の地表にあたり、その続きが北に延びていることが判明した。これに基づいて尾根の先端部分の、事業にかかる部分のはば全面に調査区を設定した。ただし北側については盛り土が深く、安全確保のため、用地界までの調査を行えなかった。また南側も隣接する道路の安全確保のため、土手を残して調査を行った。調査面積は423m<sup>2</sup>である。

調査は重機により表土を除去した後、人力による遺構検出、掘り下げを行った。その結果、縄文時代中期後葉の住居址3・弥生時代後期の住居址1、各時期の土坑216基を検出した。

測量は游JASSTYKに委託して基準点の設定および写真実測を行い、一部は手書きによる測量を併用した。基準点の座標は以下の通りである。

Ax-12(第1号住居址の北・全体図の中にドットで示した。)

国家座標第Ⅴ区系 X = -23654.00m, Y = -72376.00m

### 第3章 調査の結果

#### 1) 繩文時代の住居址

##### 1 第1号住居址（第4図）

調査区の南部で検出された。南西部を梅の木の搅乱によって破壊されており、この部分からの土器の出土がこの遺跡の発見の契機となった。南側は過去の耕作の際大きく削平され、住居の壁などは失われているが、南東側の柱穴が削平された部分に残っていてプランを復元することができた。

住居の入口は南側で、不整形と推定される。奥行は約3.3m、幅は約3.4m、主軸はN-5°-Wとなる。壁は北側の半分強が残っている。床は地山のロームを固めており、平坦で非常に固くなっている。柱穴はP<sub>1-3</sub>の3基が検出された。南西の搅乱により破壊された部分にも1つあって4本が対象に並ぶ構造であったと推定される。いずれも柱痕等は認められなかった。炉は4つの偏平な石材を並べた石囲い炉で残存状態は良好である。中心部の掘り込みは浅く、中はわずかに焼けている。

遺物は覆土の床面直上よりやや上のII層からまとまって廃棄された状態で多量の土器が出土した。残存状態が悪いものも多かったが、樹脂含浸処理後に接合の結果、数個体の器形を復元することができた。中期後葉I期のまとまった資料である。（第9図1～第2図8）

1は低い幅広の隆帯で4分割した器面を半截竹管状の工具による沈線で埋めている。隆帯の周辺や内側には工具の先端による連続した押し引きが施され、区画内に埋めたあとに隆帯の周辺に沈線を入れている。この手法は中期後葉II期以降の唐草文系の土器と共通したものである。2も隆帯周辺の連続した押し引きを除き、1と同様の文様をもつ土器である。3は4単位の波状口縁をもつ深鉢の上半部の破片である。隆帯の周辺に連続した押し引きを入れ、中を半截竹管状の工具による沈線で埋めている。4～6は口縁部に貼り付けによる重弧文を持つ深鉢である。4は縦の隆帯で4分割した口縁部に、各区画内に2組づつ、計8単位の重弧文を入れている。重弧文の中心部分には、はしご状に隆帯を付けたものと、そうでないものがあるが、全体の構成は欠損部が多いため不明である。胴部の下半には8単位の隆帯内を沈線で埋めた鶴文が巡らされている。5は頸部の屈曲から上に偏平な粘土紐を貼った重弧文を持つ。胴部は隆帯で8単位に区画され、その中を半截竹管状の工具による縱横の沈線で埋めている。縦の隆帯の上には小さな偏平の粘土紐が貼り付けられている。この土器は1号住居址の覆土から出土したもののほか、2号住居址付近からも破片が出土し、接合している。6は重弧文の下に横に巡らせた隆帯の上下に連続した押し引きを入れている。頸部のくびれた部分の外側には、器面を4分割する隆帯に連続した4単位の柱状の装飾が付いていたものと思われる。胴部の上半は沈線で埋められ、その下は無文となっている。

7は深鉢の口縁部につく把手である。口縁から続く板状の突起の外側に粘土塊を貼り付けて三角に整形し、その上に葉脈状に粘土紐を貼り付けている。12の口縁部に見られる突起と同様に、口縁部の対角上に対になって付くものと思われる。同一個体と思われる破片が他にも出土しているが、図示していない。8は口縁部に重弧文をもつ深鉢である。口縁の下部から胴部上半の4分の1弱に遺存している。重弧文と体部の縦横の沈線文は、半截竹管状の工具で描かれており、頸部の内面には整形時の工具痕が認められる。

拓影（第12図1～20）で示した破片資料も、器形を復元できたものと同様に器種や模様構成をもつものがほとんどである。このほかにも今回図示できなかった数個体分の深鉢の破片が出土している。

石器の出土量は少なく、石錐2点（第14図1・3）、安山岩製スクレーパー1点（同10）、打製石斧1点（同14）

が出土したのみである。

本址の覆土中より出土した土器は中期後業Ⅰ期に位置付けられるが、床面よりやや高い位置からの出土であることや、遺跡内の他の場所で出土したものと接合したものがあることから、本址に直接伴ったものではなく、本址の廃絶後に廃棄されたものと思われる。住居址自体の時期を直接決定できる遺物はないが、炉などの形態や、遺跡内から覆土内に廃棄された土器より、やや先行する段階の土器の出土がないことから、この土器群の時期とあまり大差ないものと思われ、縄文時代中期後業Ⅰ期に位置付けておきたい。

## 2 第3号住居址（第5図）

II区の中央部南側で検出された。南側を過去の耕作の際に削平され覆土の上部にもいくつかの擾乱が入っている。床面の直上からは多量の炭化材が出土しているが、床面直上からの遺物の出土が少ないとや、炉石が抜かれていることなどから、火災により廃絶されたものではなく、住居の廃絶時に上部の構造物を燃やしたのではないかと思われる。炭化材を検出した時期に悪天候が重なったため、材の加工痕等についての精査や、写真撮影および図化時の清掃については十分にできなかった。図では炭化材の分布範囲と、現地で視認できたおおよその木目の方向を示すにとどまった。

入口は南側で、不整形方と推定される。奥行は約3.9m、幅は約3.7mと推定される。主軸はN-2°-Eとなる。壁は削平されている南側を除き残っているが、しっかりと掘り込まれている。埋甕の南側でわずかに切れるが、ほぼ全体に周溝が巡っている。床は地山のロームを固めており、平坦で固くしまっている。柱穴は主軸線をはさんで、ほぼ対称に4本が検出された。北東と南西の2本がやや深くなっている、P<sub>2</sub>を除く3本には柱痕が認められた。

炉は石囲い炉と推定される。廃絶時に炉石が抜かれたと推定され、東側の1つのみ残っている。擾乱により一部が破壊されているが、中央部の掘り込みはしっかりとしていて、中はよく焼けている。

埋甕（第10図10）は唐草文系の深鉢の底部を破壊して正位で埋設している。位置は主軸よりわずかに西に寄っており、掘り方は土器の大きさとほとんど変わらない。使用された土器の口縁部の隆帯以下の文様は、4単位のJ字状の隆帯の間を沈線で埋めており、通常の唐草文系土器と変わらない。しかし口縁の無文部分は、下半分が段状にくはんでおり特異なものである。

遺物の量は少なく、埋甕以外は、覆土中から数片の土器片が出土したのみである。第10図11は深鉢の口縁部の破片で、炉の中から出土した。口縁の一部がやや波状になっており、1~2単位の把手が付いていたものかもしれない。石器の出土はなく、石製品（第14図6）が出土しているが、洗浄時に確認されたため出土状況は不明である。

本址は出土遺物より、縄文時代中期後業Ⅲ期に位置付けられる。

## 3 第4号住居址（第6図）

調査区の中央部で検出された。第2号住居址と切り合っているが、ロームの上の黒色土から掘り込まれていることや、両住居址の遺物が混在していたことから前後関係を誤認して掘り下げ、あとから断面で確認した。本址北西部の上に第2号住居址が作られている。本址と前後する時期の土坑との切り合いが著しく、残存状態はよくない。住居址として扱ったが炉などの施設が確認されておらず、竪穴状造構としたほうが適切かもしれない。南側は大半を削平されている。奥行は約5.1m、幅は約5.2m、主軸はN-3°-Eとなる。床は地山のロームを固めている。切り合いや擾乱等のため残存状態はよくない。柱穴は本址に伴うと判断されたものを示したが、雖然

としていて再検討を要する。遺物は覆土中より少量の土器片が出土している。図示できたものは少ない。第10図12は貼り付けによる重弧文を持つ深鉢の口縁部の破片である。8分の1強が遺存している。本址は出土遺物より、縄文時代中期後葉Ⅰ期に位置付けられる。

## 2) 弥生時代の住居址

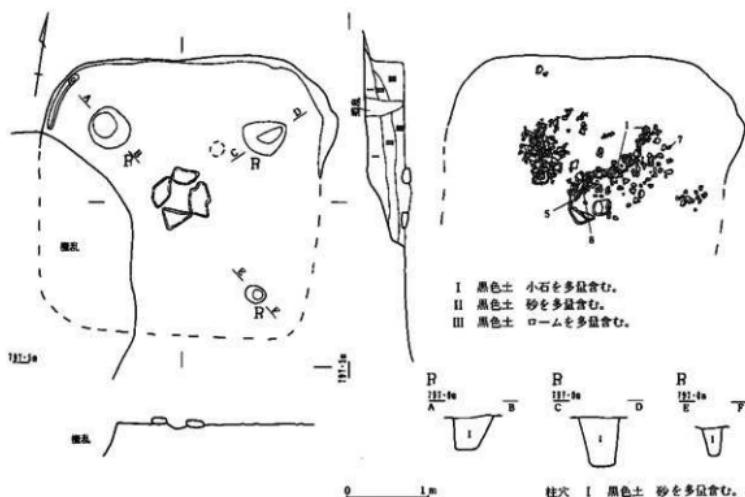
### 第2号住居址（第10図）

調査区の中央部に位置する。南側の大半は、後世の削平等のため失われている。掘り下げ中に第4号住居址を埋めている部分の断面で、本址の床面とII層の上面が同じレベルで続いていることが確認されたため、貼り床状のものがあったものと推定し、本址が第4号住居址の上に作られたものと判断した。しかし遺構の掘り込まれている土と覆土の識別が困難であり、また貼り床とした面に際立った圓さ等が認められないため、切り合については再検討を要すると思われる。第4号住居址の北側の壁付近からは本址に伴う弥生時代後期の土器がまとまって出土しており、この付近に第2号住居址に伴うなんらかの施設が掘り込まれていた可能性が高いが、前記の理由により確認できなかった。住居址として扱ったが炉などの施設が確認されておらず、竪穴状遺構としたほうが適切かもしれない。残存状態が悪く、全体のプランは不明である。奥行は残存部分で約2m、幅は約2.6m、主軸はN-4°-Eである。床は地山のロームを固めている。奥壁に沿って周溝が通り、中央よりやや奥の床面に2ヶ所の焼土が認められる。いずれもよく焼けているが、厚さは1cm程度である。柱穴はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>が覆土などから本址に伴うものと考えたが、他時期の遺構との切り合いが著しいため、はっきりしない。

遺物は覆土より少量の土器片が出土しているが、他時期のものなどが多く、復元・図示できたものは少ない。第10図16・17は口縁部に櫛描波状文を巡らせた甕である。16は全体の2分の1弱が遺存する。胎土は明褐色で砂の細粒が含まれる。内面には板状の工具による調整痕が残っている。17は口縁部の約3分の1が遺存する。表面には炭化物が厚く付着している。内面には板状の工具によるハケ目が見られるが、摩滅が著しい。いずれも天竜川上流域に見られる土器である。18は小型の甕で破片より復元実測した。肩部から上に櫛描波状文を巡らせ、途中に簾状文が入る。内面には櫛状の圧痕が認められるが、櫛表面の繊維痕等は明瞭でない。19・20は底部の破片である。拓影で示した第13図41・42はいずれも甕の破片である。

本址は出土遺物より、弥生時代後期に位置付けられる。

遺跡出土状況 (図中のNoは実測図に対応)



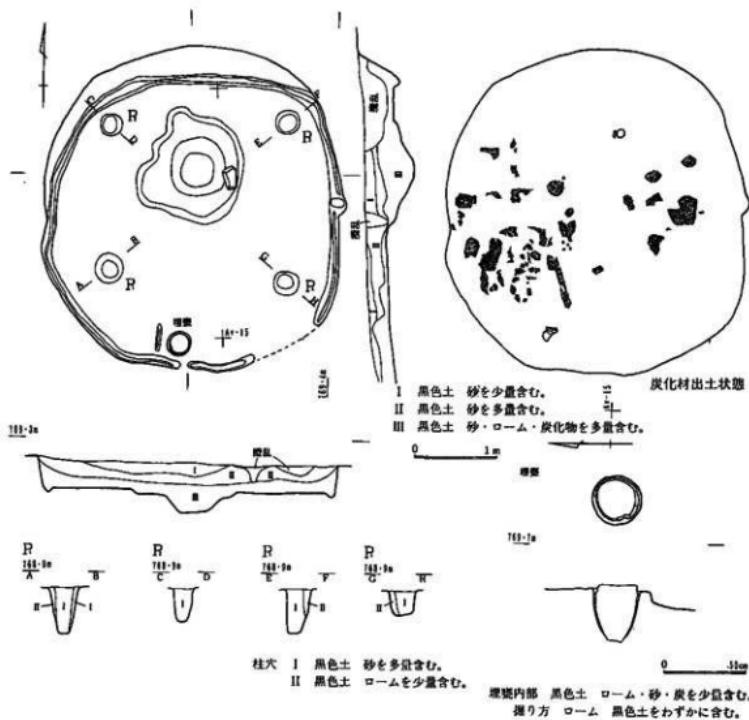
第4図 第1号住居址 (1/60)

### 3) 集石炉 (第8図)

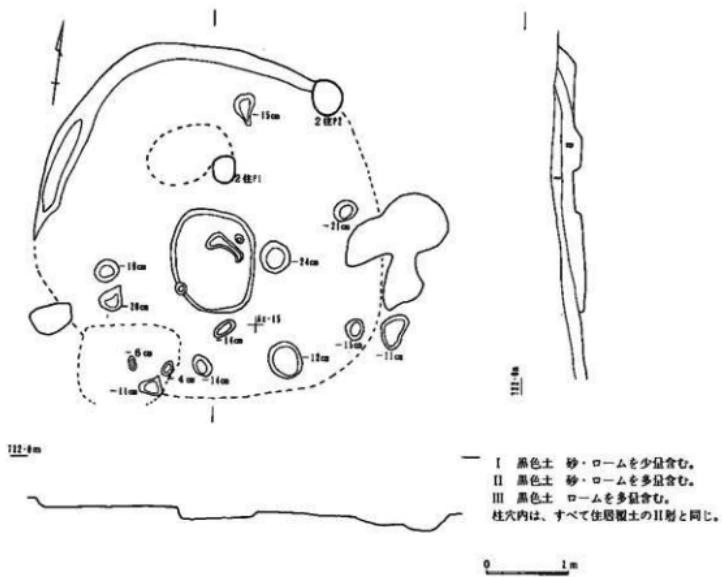
調査区の南部で検出された。調査前には土手と下の段の畑となっていた部分の境にあたるため、南側の上部の一部が、耕作時に破壊されている。直径約1.3mの不整円形で、下層の掘り込みは約20cmである。拳大の礫を集めしており、礫の間の黒色土中には少量の炭化物が混入していた。本址に直接伴った遺物はなく、明確な時期は不明であるが、今回の調査で押型文土器が數片出土しており、本址もそれに近い時期のものと推定される。

### 4) 土 坑

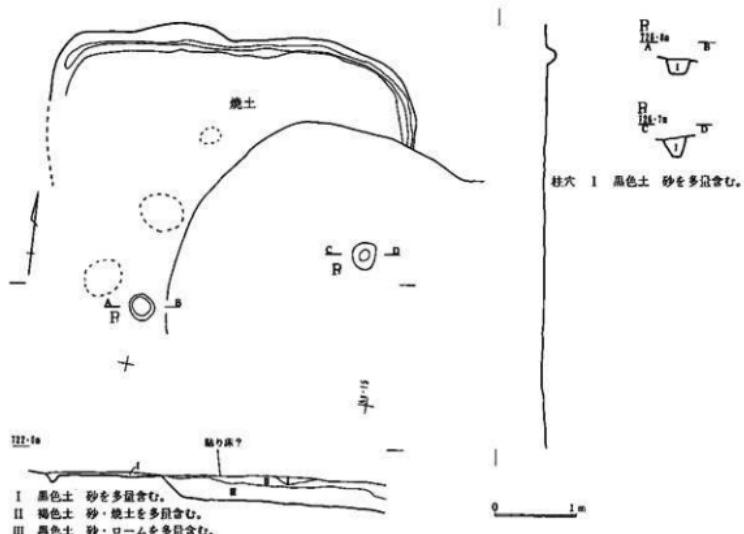
今回の調査では160基検出された。覆土中の遺物から縄文時代早期から中世の各時代に渡るものと推定されるが、明確な時期を決定できたものはほとんどない。各時代の遺物が混在するものが多く、今回は時代別の分布などの考察は行っていない。



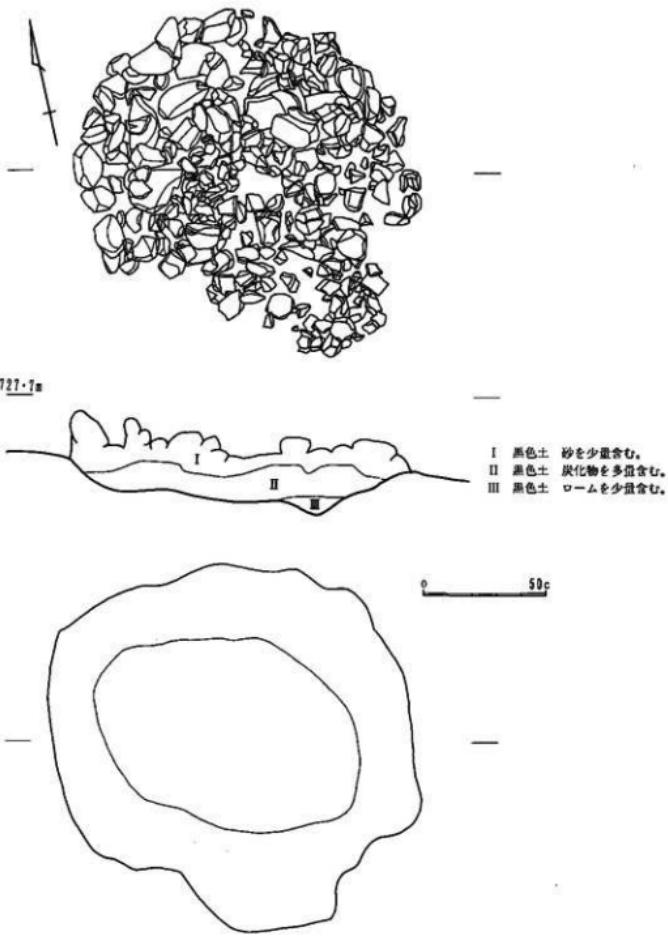
第5図 第3号住居址 (1/60)



第6圖 第4號住居址 (1/60)



第7図 第2号住居地（1/60）



第8図 集石炉 (1/20)

## 5) 出土遺物

### 1 繩文土器

#### A 早期前葉の土器 (第13図43~45)

押型文土器が4点出土しているが、小破片で図示できなかった1点を除き拓影で示した。いずれも2往の覆土とその北側の斜面からの出土である。43・44は同一個体と思われる。細かい棒円文が施され、胎土は明褐色で砂の細粒を多く含む。45は他の2点に比べ器壁が厚く、胎土には微細な纖維と砂の粗粒が含まれる。いずれも細久保式土器である。

#### B 早期後葉～前期初頭の土器 (第10図13・第13図46~52)

11点出土したうち、8点を図示した。小破片のため時期を明確にできないが、数時期のものがあると思われる。第10図13は深鉢の口縁部につく突起である。円筒状になっているが、下部は挟まっており、注口にはならないと思われる。突起の周囲に工具の先端による連続した刺突が巡らされている。胎土は明褐色で砂の細粒と纖維が多く含まれる。類例は東海地方の資料の中に散見される。

拓影で示した第13図46~51は厚手で、胎土に多量の纖維を含む。表面の剥落等が著しく、文様は不明である。52は太い棒状の工具による沈線が施されている。胎土は暗灰色で纖維は含まれない。

#### C 前期後葉の土器 (第13図54)

図示した1点のみ出土した。半截竹管状の工具による沈線と刺突が施される。胎土は明褐色で砂の細粒が含まれる。

#### D 中期中葉の土器 (第13図55)

小破片が1点出土している。隆帯による区画に沿って工具による連続刺突が施される。中期中葉II期に位置付けられる。

#### E 中期後葉の土器 (第10図9・14、第11図15、拓影第13図55~63)

検出された住居址と同時期の破片が、遺構外からも少量出土している。いずれも唐草文系の土器で、胎土に雲母の細粒を含んでいる。

第10図9は第2号住居址の覆土から出土した。口縁から胴部の約4分の1弱が残存している。波状になる口縁の下に棒状の工具による連続刺突を巡らせ、そこから4単位の細い隆帯を垂下させ、その脇にも連続刺突を施している。口縁の下部と胴部の下半には4単位の弧状の隆帯を巡らせ、中を半截竹管状の工具による沈線で埋めている。この区画の内側は、沈線で埋めたあとで、隆帯に沿ってナデている。内面は横方向のナデ調整が施され、非常に滑らかである。

第10図14は土坑97より出土した。口縁に4単位の波状の突起をもつ深鉢で、口縁部の4分の1弱が遺存する。口唇の突起の頂部は、口縁の下から続いている隆帯の上に、それと交差するように別の隆帯を貼り付け、2本の隆帯をねじったようにしている。その両脇では口唇の両側の縁が盛り上げられ、中心の隆帯をはさむようになっている。口唇の下には太い棒状工具による連続刺突が施され、これと同じものがその下の文様の中心部の三日月状の隆帯の中にも入っている。体部の文様は隆帯による区画の中を、太い半截竹管状の工具による沈線で埋めた

あと、隆帯に沿ってナデを入れている。

第11図15は第2号住居址の北の土坑132の上部から出土した。この土坑は土器が埋まっていた下層のロームの面まで掘り下げてから確認されたもので、その上層の黒色土の部分から掘り込まれていたのかは不明である。出土状況は1個体分の土器片が折り重なるような状態で出土し、土器の下端部は土坑の掘り込み内に入っていた。黒色土から掘り込まれた土坑の中に土器があったものと推定される。この土器が出土した直後に天候が悪化したため、写真撮影のみで取り上げ、出土状態の図化は行っていない。4単位の突起をもつ大型の深鉢で、相対する2単位の口縁部と、胴の屈曲部のほぼ1周分の破片が残っている。文様は隆帯で区画した中を沈線で埋めており、場所によっては隆帯に沿って工具の先端による連続した押し引きを施している。この押し引きに用いられている工具は、図の右と左の正面になっている部分では異なっており、右側のほうが先端が鋭利なものが用いられている。口縁の突起の間の部分の下には、隆帯による貼り付けが付けられ、そこから胴部に垂下させている。胴部の貼り付けによる装飾は破片で見ると数種類のものがある。右の図の中央より右側の胴部には2本の隆帯をねじった装飾が付くものと思われる。この土器の最大の特徴は胴部下半の屈曲部より下の文様で、隆帯による区画の中だけでなく、区画の外にも沈線が入れられていることである。このような文様をもつ土器の類例は岐阜県飛騨地方の資料の中に散見される。

第13図56・57は重弧文を持つ深鉢の破片である。重弧文はいずれも沈線で描かれている。58は深鉢の頭部の屈曲する部分の破片である。隆帯に沿って棒状の工具の先端による刺突が施される。59~63は深鉢の胴部で隆帯による区画内を沈線で埋めている。この一群は59を除く7点が中期後葉Ⅰ期からⅡ期の古い段階、59はそれよりもやや新しい段階に位置付けられるものと思われる。

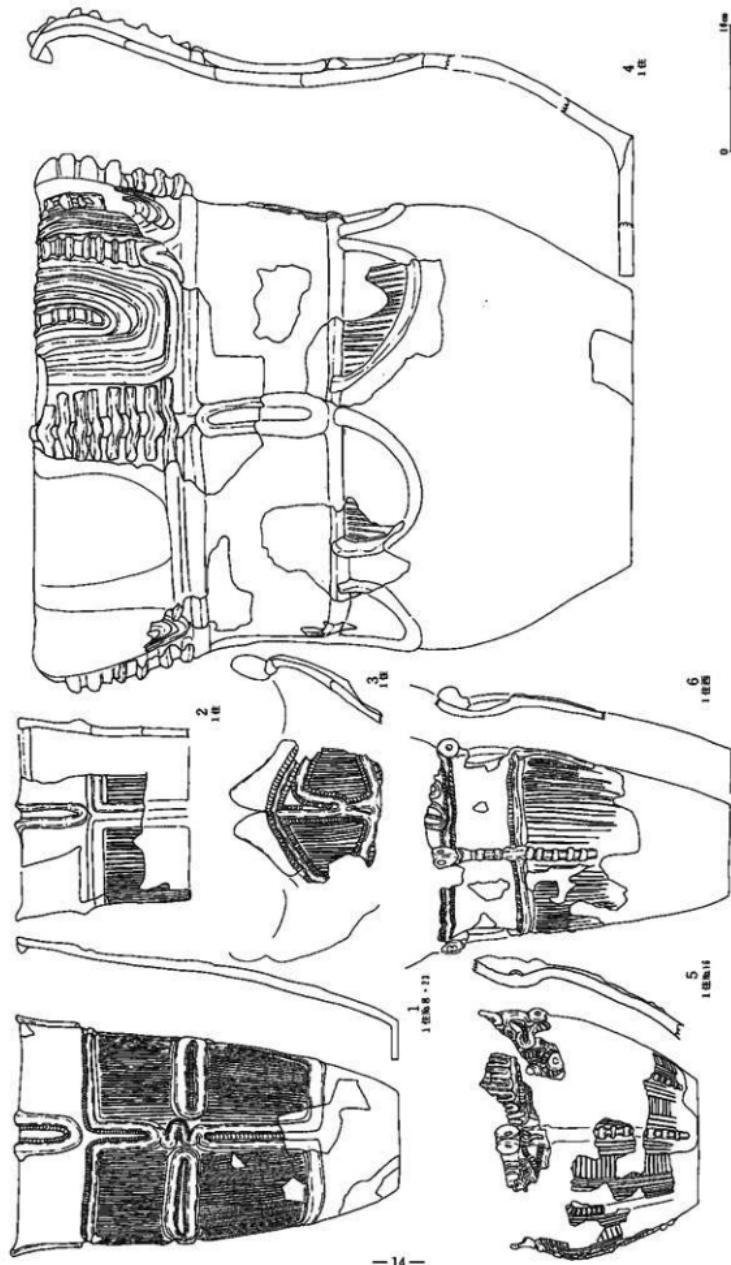
63は列点状の刺突が施される。胎土等から中期中葉~後葉のものと思われるが、明確な時期は不明である。

#### F 後期の土器（第13図64）

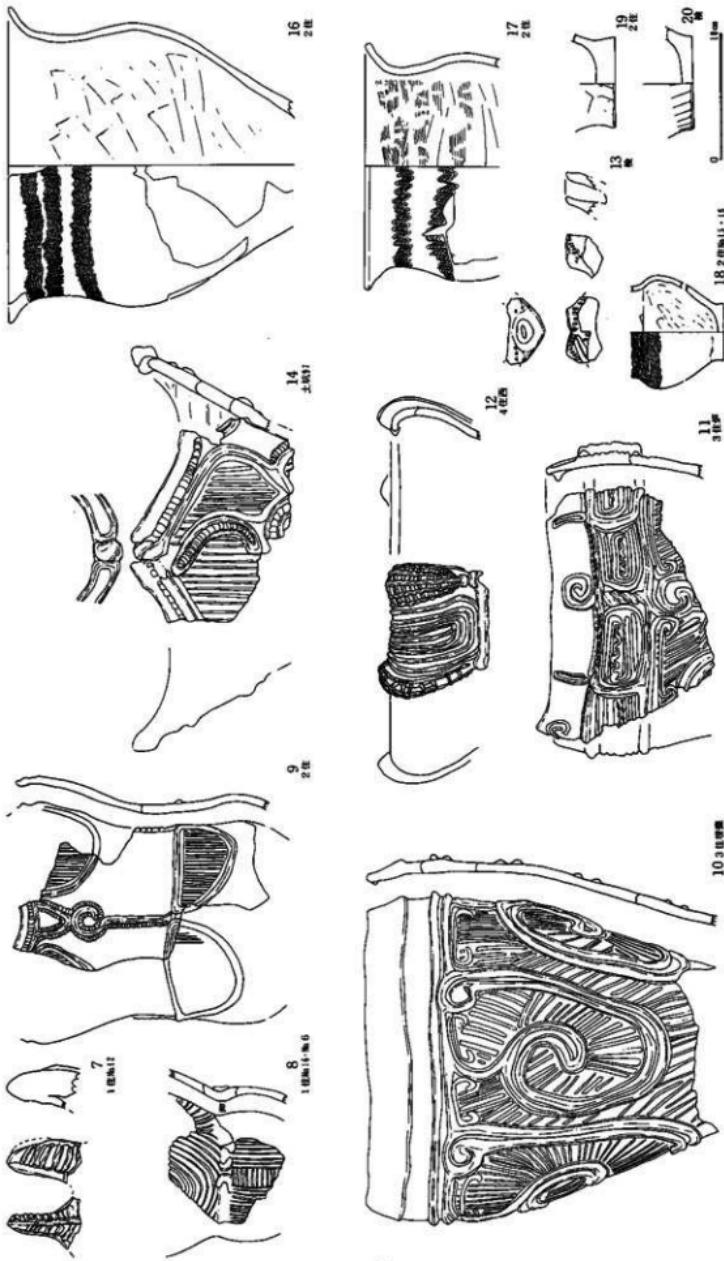
I区の東側より破片が1点出土している。口縁の文様帶の下で屈曲するものと思われるが、器種は不明である。屈曲部の上に細い沈線で文様を描いている。小破片のため明確な時期は不明である。

（図中の出土位置の表記のうち「検」は、遺構検出時に出土したことを示す。）

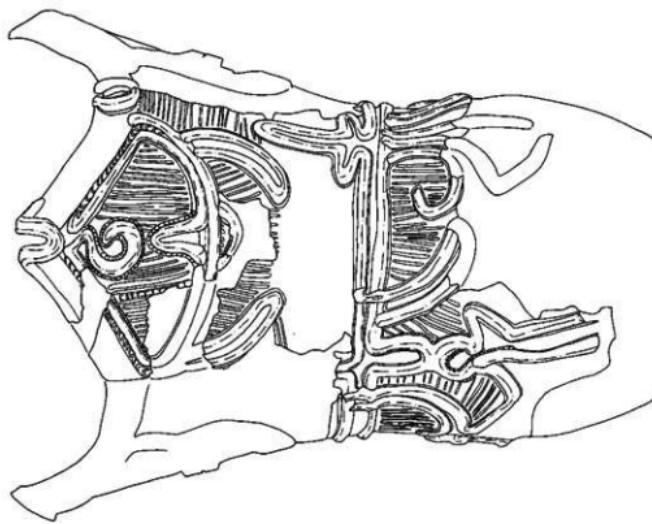
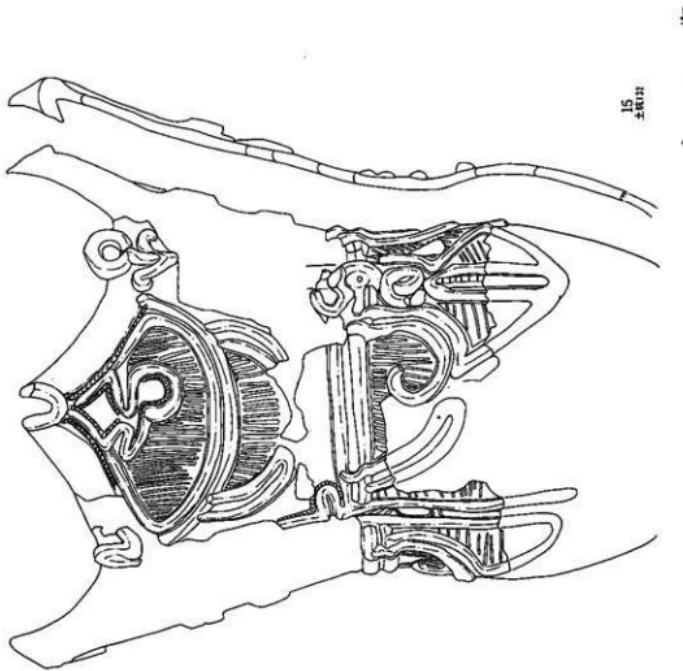
第9圖 土器米測圖(1) (1/4)

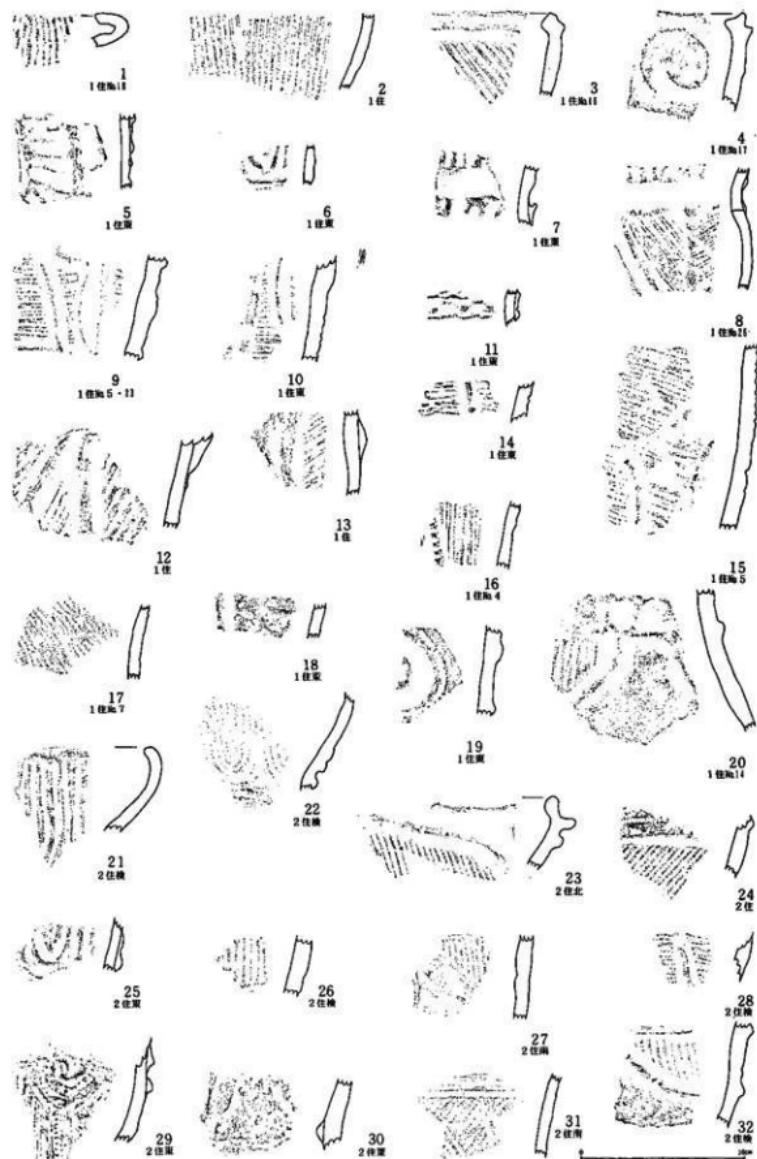


新石器时代工具图 (1/4)

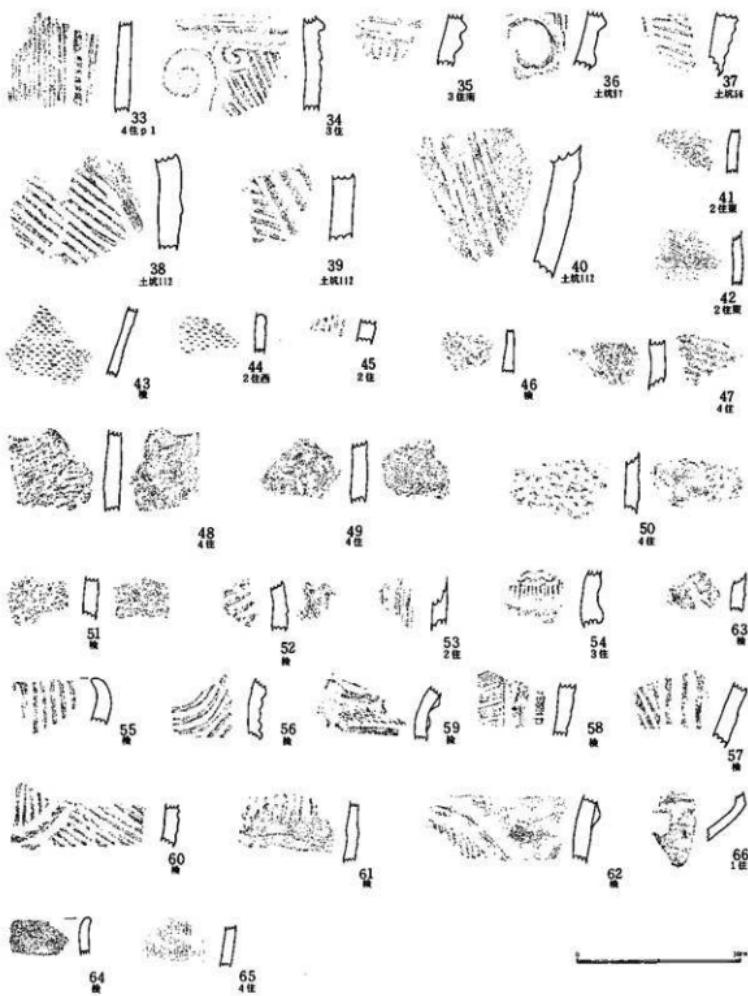


第11圖 土器夾測圖(3) (1/4)





第12図 土器拓影(1) (1/3)



第13圖 土器拓影(2) (1/3)

## 2 石 器 (第14・15図)

今回の調査では碎片まで含めて72点出土した。洗浄後、石器を抽出して注記を行い、帝アルカに委託して図化を行った。図化は期間等の制約により定型的なもののみにとどまったが、全体の量が少ないので本遺跡の定形石器の大半は図示することができた。なお観察表の掲載は行わず、図示した石器の重量及び石材は図中に示した。

石材の鑑定及び、近隣での産出地等については、永井節治氏にご教示いただいた。

### 1) 石 鋸 (第14図1～3)

出土した3点を図示した。1のみ完形で、他の2点は欠損している。いずれも比較的厚みのある素材が使用されている。2は茶色のチャートで地元の石材を使用していると思われる。

### 2) 小型スクレーバー類 (第14図4・5)

出土した2点を図示した。5はやや青みがかった黒の線が入る乳白色のチャートで、左の図の右下側の1側縁に刃部をもつ。6は灰色がかった緑色のチャートで、図の上側の1側縁に刃部をもつ。いずれも地元の石材と思われる。

### 3) 大型スクレーバー類 (第14図7～10)

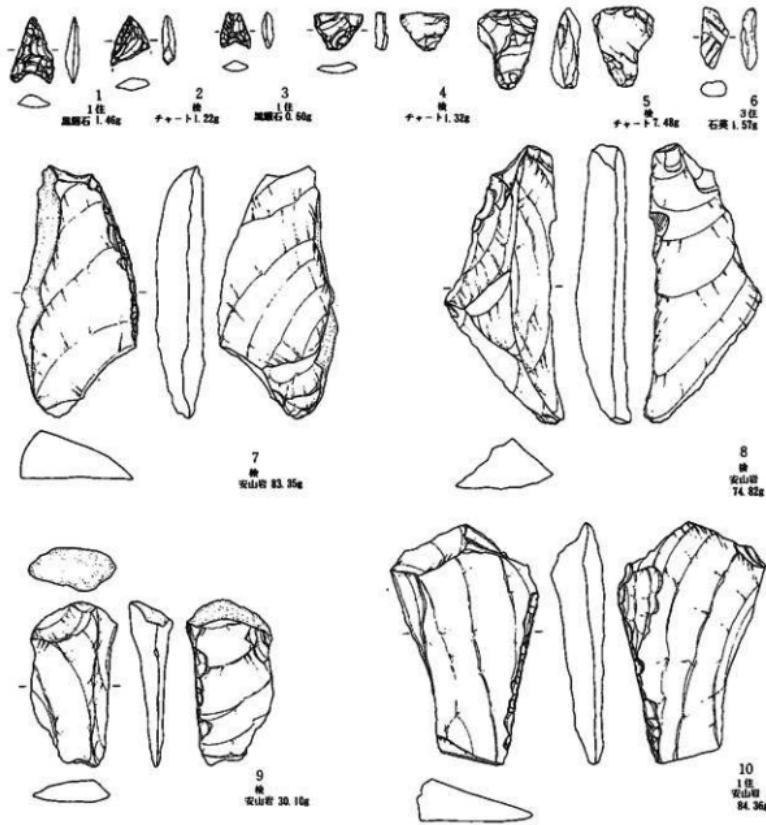
出土した4点を図示した。いずれも安山岩の綫長の剥片の側縁を調整し刃を付けている。安山岩の原石と剥片や碎片類は今回の調査では数点出土しており、これも近くにある石材を使用していたものと思われる。

### 4) 打製石斧 (第14図11～第15図15)

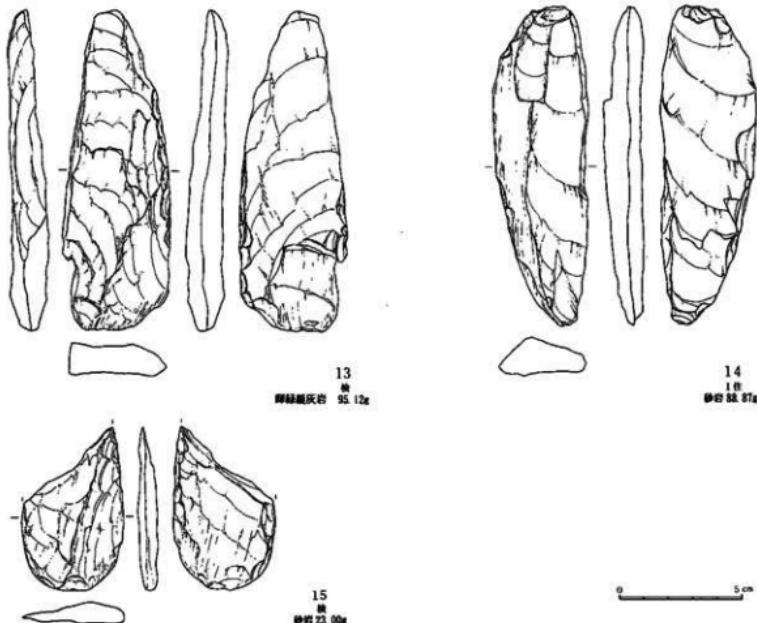
出土した5点を図示した。11～13は輝緑凝灰岩を素材としている。この石材を使用した打製石斧は、木曾の遺跡では多く見られる。木曾谷では日義村付近に岩壁があり、木曾川などでも軽石として採集できるので、そうした石材を使用したものと思われる。14・15は砂岩を素材としている。14は図の左側の一面のみに、被熱によるものと思われる変色が見られ、先端は摩滅が著しい。15は自然面が大きく残っている。これも地元にある石材を利用したものと思われる。

石器に使用されている石材をみると、黒曜石以外のものは遺跡の周辺で入手が可能なものが使われている。小型の石器に使われている黒曜石とチャートの量を比較してみると、黒曜石がやや多いものの、大差はないようである。今回出土した石器は、縄文時代早期・前期等の若干の遺物の出土や、弥生時代の遺構の存在はあるものの、おおむね縄文時代中期後葉のものと考えよいと思われる。同じ上松町で調査されたお宮の森裏遺跡（1992・93年調査・整理作業中）の草創期末の住居址から出土した小型の石器の素材は、ほとんどが黒曜石で大きな違いが見られる。また大桑村薬師遺跡などの後期から晩期の遺跡では、下呂石が主体となっている。

近年では王滝村田中洞遺跡でチャートの露頭に近い前期の集落が調査され、その石器の様相が報告されている。今後こうした事例と合わせて考察を行うことにより、木曾の縄文時代の石材利用の変遷等について明らかにできるものと思う。



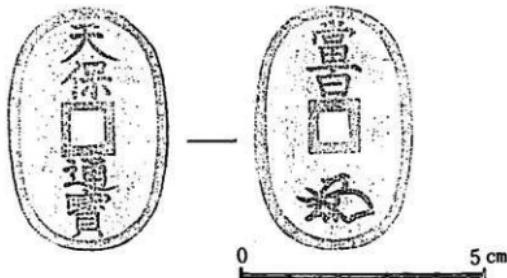
第14図 石器実測図(1) (1/3)



第15図 石器実測図(2)

### 3 石製品（第14図 6）

1点のみ出土した。洗浄時に確認されたため、出土状態は不明である。石英の1面に細い溝が彫り込まれている。団の上側の2本の溝は、先端が鋭利な工具で深く彫られている。他の面には明瞭な擦痕等は確認されなかつたが、風化しているため加工が行われたのかは不明である。素材の石英は、木曾谷では各地に産出しており、それを利用したものと思われる。



第16図 錢貨（实物大）

#### 4 弥生時代の土器（第13図64・65）

遺構外から出土したもののうち、胎土等からこの時期のものと思われる2点を拓影で図示した。いずれも明確な時期は不明である。

#### 5 古代以降の遺物

##### A 平安時代の遺物

灰釉陶器の碗の底部の破片が1点出土しているが、小片のため図示していない。

##### B 中世の陶器

遺構外から山茶碗の破片が9点出土しているが、小片のため図示していない。12世紀代のものが1点あるが、大半は13世紀後半から14世紀のものである。

##### C 近世以降の陶器

数片出土した。すべて耕作土中からの出土で、器形を復元できるものはほとんどなく、図示していない。明治以降のものが大半を占め碗・皿・すり鉢がある。

##### D 錢 貨（第16図）

南西部の遺構検出面より天保通宝が1点出土した。表面の一部に錆が生じているが、残存状態は良好である。

## 第4章 調査のまとめ

今回の調査は小面積であったが、尾根の先端の平坦部分のはば全体を調査することができ、多くの知見が得られた。ここでは時代ごとに成果と問題点についてまとめてみたい。

縄文時代早期から前期の遺物の出土量はわずかであったが、集石炉1基が検出された。確実な供伴遺物がなく、時期は検討を要するものであるが、木曾谷での調査例に1例を加えることができた。

縄文時代中期では、後葉の住居址3軒が検出された。第1号住居址では覆土中に廃棄された土器の資料を得られた。この時期の遺物は土坑や他の住居址の覆土からも出土しており、まとまった良好な資料となった。住居址の覆土中に一括して廃棄された土器としては、新しい時期の事例である。木曾谷の遺跡では検出例がなく、貴重なものである。この廃棄された土器の一部は、数点であるが遺跡の中の別の場所から出土した破片と接合している。接合した破片の出土場所は、住居址よりも高いところであり、自然に移動したものではなく、かつてその場所に近いところにあった土器が、第1号住居址の中に廃棄されたと考えられる。遺跡中の土器の使われた場所と廃棄された場所を何うことができる貴重な資料であり、縄文人の精神生活を解明する上で貴重な資料である。

この土器群は唐草文系土器のI段階に位置付けられ、中期中葉の土器から後葉の唐草文系土器に移行していく時期のものである。木曾谷では王滝村の里宮・崩越遺跡、大桑村の大明神遺跡などで、この時期の断片的な資料が出土している。土器の器形を見ると第9図1・2のように底部から口縁までまっすぐに立ち上がる深鉢や、4~6・9・15のように頸部で一度くびれるものなど、中期中葉末の土器と共通している。文様は隆帯で器面を区画した中を、縱（または横）方向の沈線で埋めて、そのあとで隆帯に沿って周辺をなでている。この技法は中期後葉II期以降の唐草文系土器の施文方法と共通したものである。この段階の土器は松本平・眞訪・伊那谷など、県内のこの土器が分布する地域のなかでも大きな差異は見られないようである。近年中信地方では、松本市山影遺跡・塩尻市峯畑遺跡などで、中期中葉末から後葉初めの土器のまとまった良好な資料が出土している。今後それらとあわせて検討し、土器の変遷などについての考察を行ってみたい。

また第11図15の土器は、中期後葉I期の土器からII期の土器への移行を考える上で重要な資料である。この土器の頸部下半の隆帯による区画の外の沈線は、II期以降の隆帯で区画した器面を綾杉状の沈線で埋める深鉢（この遺跡の出土資料では、第3号住居址の埋甕など）の祖型となるものではないかと思われる。I期とII期の土器を比較すると器形に大きな違いがあり、それがどのように変化していくのかは今後検討して行かなければならぬが、類例が増加すればこの変化の様子がたどれるのではないかと思われる。

さらにこの土器の出土状態も変わったものであり、今後注目して行きたい課題である。

その次の中期後葉III期では1軒の住居址が検出された。上松町ではこの遺跡に先立って調査された最中上遺跡で、この時期の住居址が6軒検出されているが、道路の拡幅工事にともなって調査されたものなので、完掘できたものは初めてである。遺物の量は少ないが、埋甕の口縁の無文部には段があり、類例のないものである。この時期の土器は、木曾谷では前述の最中遺跡や大桑村薬師遺跡（1991年調査・現在整理作業中）などで、近年まとまった資料が得られ、その様相が明らかになりつつある。現在までの知見では、前の段階には周辺地域とあまり

変わらない土器が見られ、II期以降には唐草文土器が主体になり、これに若干の東海系の土器などが伴うようになっている。II期の後半からIII期にかけてはこの傾向が顕著になってきて、以降にさまざまな影響を与えていくようである。さらにIV期になると下伊那地方に多く見られる結節縄文をもつ土器が加わるようである。この東海系の土器の入り方などは、木曾谷でも南北で違いが見られ、南に行くほど搬入された土器や、なんらかの影響を受けたと思われるものが多く見られる。こうした土器がまとまってみられるのは、上松町付近がその北限になるものと思われる。また今後分析を進めて行けば、木曾の唐草文系土器の特性が明らかになってゆくと思われる。周辺地域の資料との比較などを重ねて行きたいと思う。

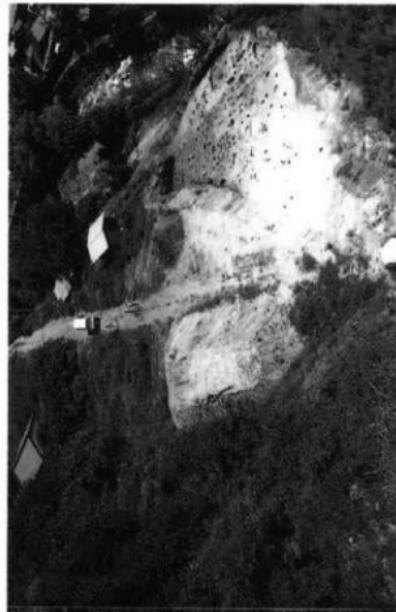
石器の出土量は少なかったが、木曾での中期後葉の初めの時期の石器組成などを知る上で基礎的な資料を得ることができた。

また石製品は1点のみであるが、類例の少ないものであり、今後注目される資料である。

弥生時代では後期の住居址が1軒検出された。上松町では過去に見塔遺跡で石包丁が1点採集されていたが、この時代の土器は発見されておらず、初めての発見である。住居址の残存状態は悪かったが、器形の復元できた土器が数点あり、弥生時代の遺跡の少ない木曾谷では貴重な資料となった。出土した土器は天竜川の上流域のものと似ており、当時の木曾谷と周辺地域とのつながりの一端を伺うことができる。

以上限られた時間の中での調査や整理作業であり、十分な分析を行うことができず、雑多に問題点を上げるにとどまった。ここであげた問題については今後も検討を重ね、解明につとめたいと思う。

最後に今回の調査にあたっては、多くの方々や機関より多大なご協力をいただいた。報告書としてまとめるにあたり、改めてお礼を申し上げ結びとしたい。



1 (左上) 金比羅道峰全景 (完掘時) 北東上空より  
写真中央に奥が調査地。奥は上松市街地。  
右上に国道19号線が見える。

2 (右上) 金比羅道峰全景 (完掘時) 北西上空より  
右上に十五沢が見える。  
手前側は耕作時に削平されている。

3 (左下) 第1号柱留地 (完掘状地)  
手前側は耕作時に削平されている。  
左下は道跡の発見の実績になつた疊石。

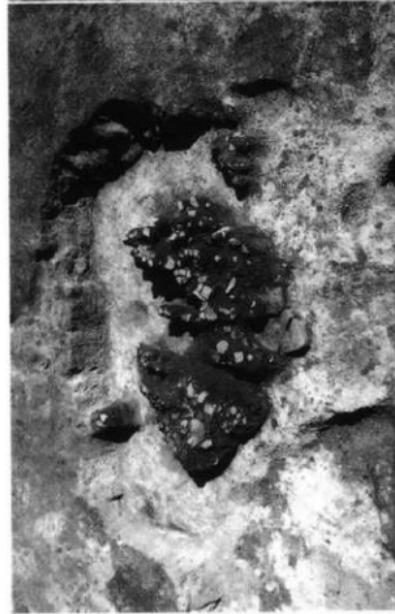




4 (左上) 第1号住居址遺物出土状態 前擲より  
甌土中に多量の土器が捨てられている。  
土器の手柄には骨石の一部が見える。

5 (右上) 同上 (部分)  
第9図4の土器がハラハラになって出土している。

6 (左下) 同上  
写真中央の土器は図示できなかつた。  
左上は写真5の土器。





7 (左上) 第3号住居遺化材出土状地　雨側より  
木面の上から炭化材が出土している。  
写真右側に大きな圓まりがある。手前には理縫が見える。

8 (右上) 第3号住居址(空器状跡)　雨側より  
右下はわずかに複雑で破壊されている。  
石縫だけの石材が残っている。

9 (左下) 同上　西側より  
奥(左) 側の壁は上のほうが崩れている。  
中の土は良く焼けている。

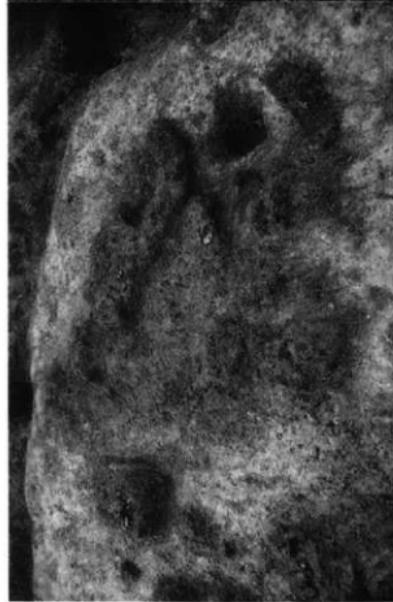


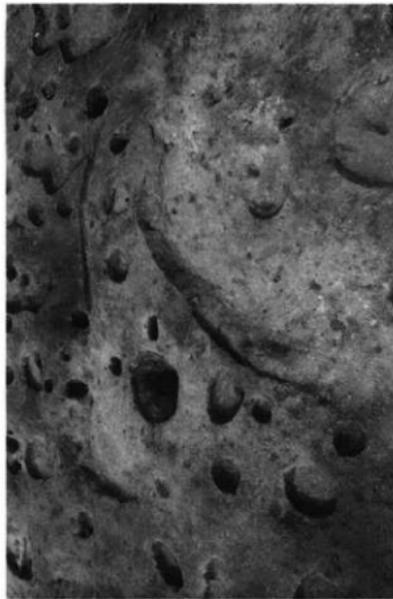


10 (左上) 第3号生居出土陶化材出土灰陶(部分) 前期より  
住居地の典型例で、種子などは認められない。

すべて陶化材料で、種子などは認められない。  
11 (右上) 第3号生居出土陶器(部分より)  
中央部に深縫の破片(第10図11)がある。

砂石の隙から左の深い部分にかけて、木の根の発育が入っている。  
12 (左下) 第3号生居址埋甕 西より  
埋まつたままの状態で手前の中分を掘つたところ。  
土器の底は焼されている。





13 (左上) 第2号住居址遺物出土状態 南側より

写真中央部の床面には燒土が見られる。

右下は第4号住居址、右上には土坑132の土器が見える。

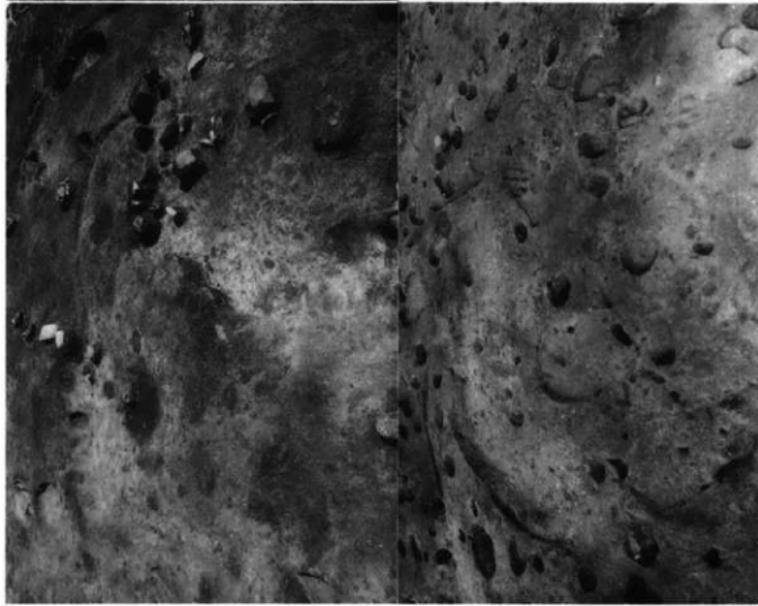
14 (右上) 第2号住居址完掘状態 南側より

他時期の土坑との切り合いや、隙字のため残りは良くない。

15 (左下) 第2・4号住居址完掘状態 南側より

写真中央部左側が第2号住居址、その下が第4号住居址。

他時期の遺構との切り合が著しく、残存状態は良くない。

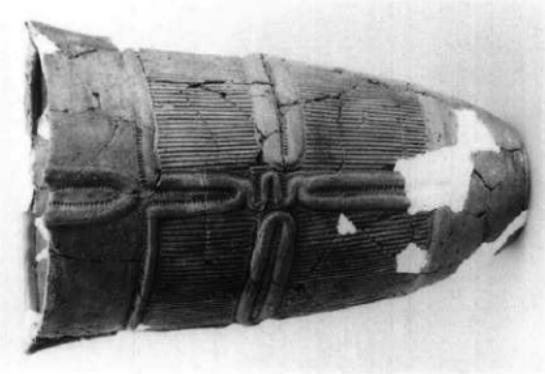




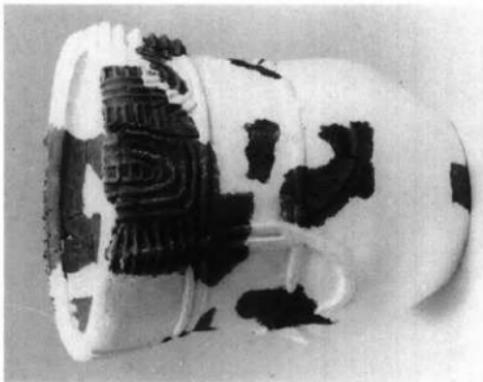
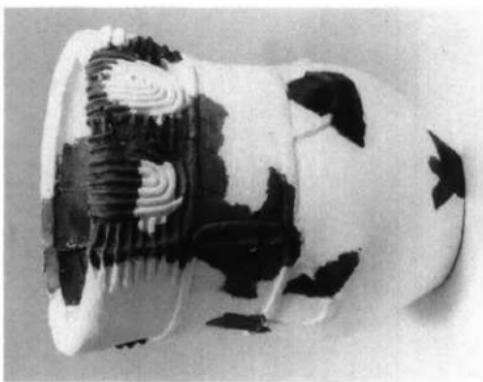
16 (左上) 集石刃。[上面突出状態] 南側より  
手前側は土手の下にかかっていたため、一部破壊されている。  
17 (右上) 集石刃。[半蔵状態] 南側より  
下層の褐色土〔色が濃い部分〕には、炭が含まれる。  
18 (左下) 土坑132土器出土状況 南側より  
第11図15の土器がつぶされて出土している。

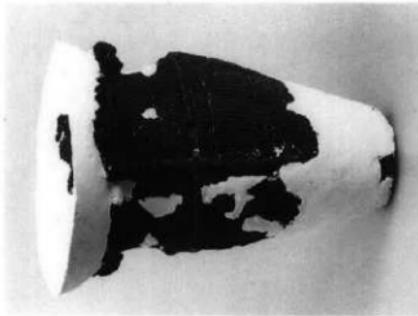


第9図1



第9図4

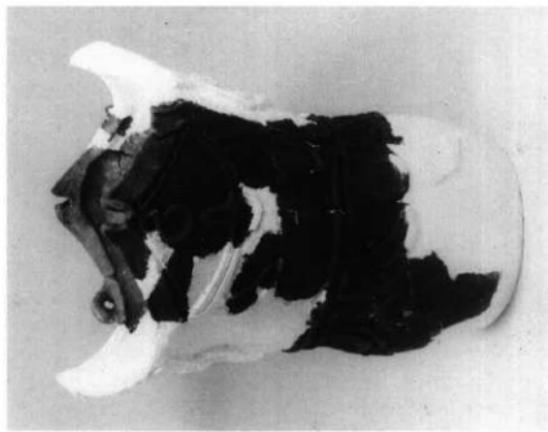




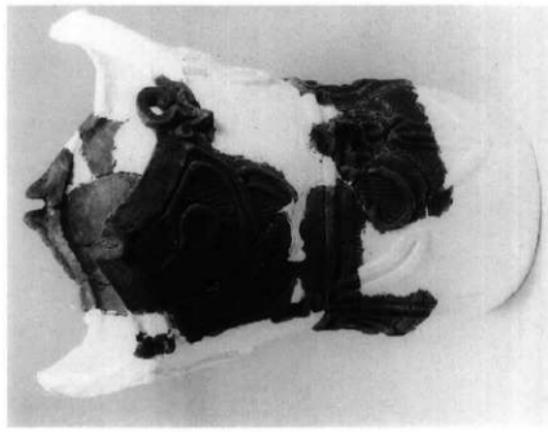
第9図6



第9図5



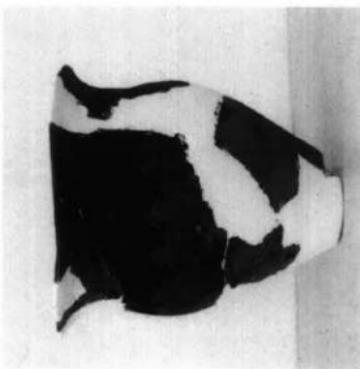
第11図15



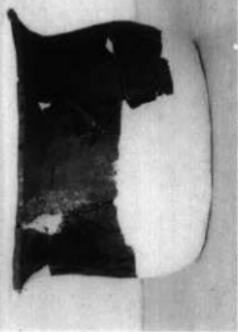
出4-128 (2)

出土土器 (3)

第10246



第10247



第10249



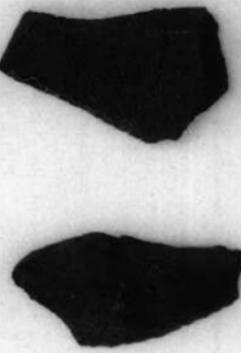
出土石器 10

出土石器

安山岩製大型スクレーパー 9

(番号は第14・15図に對応)

安山岩製大型スクレーパー 8



石器・スクレーパー類  
打製石片

1 3 2 11 15  
4 5 12 13 14

金比羅遺跡調査概要（抄録）

フ リ ガ ナ	コンビライセキハックツチヨウサホウコクショ		
書 名	金比羅遺跡発掘調査報告書		
主 著 者・従 著 者	新谷和孝・村田広司		
発 行 者	木曾建設事務所・上松町教育委員会・木曾郡町村会		
編 集 機 関	上松町教育委員会		
住 所・電 話	長野県木曾郡上松町大字小川1706 0264-52-2111		
印 刷 所	長野市柳原2133-5 鬼灯書籍株式会社		
印 刷 日・発 行 日	1994年3月1日 1994年3月15日		
所 在 地	長野県木曾郡上松町大字上松字小鶴885		
2500分の1地図名・位置・標高	上松	北緯 35° 47' 14" 東経 137° 41' 47"	標高 726m
概要	主な時代	縄文時代中期後半 弥生時代	
	主な遺構	縄文時代中期住居址 3 弥生時代住居址 1 集石炉	
	主な遺物	石器（石鏃、石斧等） 土器（唐草文等）	
	特 殊 遺 構 物		
	特 殊 遺 物		
調査期間	1993年5月21日から1993年8月26日		

こんびら  
**金比羅遺跡**

-県道改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書-

平成6年3月1日 印刷  
平成6年3月15日 発行

長野県木曾建設事務所  
発行 上松町教育委員会  
木曾郡町村会  
印刷 ほおづき書籍株式会社

